S.　Ashina

１．オリエンテーション、導入――聖書と聖書学・考古学
２～７．旧約聖書――宗教史的背景、創造、契約、王権、預言、知恵
８．新約聖書１――新約聖書学　　９．新約聖書２――神の国
10．新約聖書３――イエスの譬え　　11．新約聖書４――富　7/1
12．新約聖書５――国家　7/8　　13．新約聖書６――グノーシス
14．受講者による研究発表１　7/15　　15．受講者による研究発表２　7/22
16．フィードバック

＜前回＞神の国

（１）近代聖書学における「神の国」論

１．キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関心を占めてきた。→歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。
２．「イエス研究／終末論」の変遷：「神の国」が常に議論の中心に位置してきた。
1) 19 世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究、市民社会の倫理の教師イエス
2) 19 世紀末～ 20 世紀初頭：黙示的終末論の再発見→古代の黙示的終末論の宗教家イエス
　「イエス伝研究」の挫折、ナザレのイエスと信仰のキリストとの分裂
3) 20 世紀聖書学のパラダイムの浸透：弁証法神学、モルトマンやパネンベルク
　歴史研究としての聖書学の後退とそれに対する批判（ブルトマン学派）
4) 1980 年代以降：20 世紀の聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究、黙示的終末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエス。

（２）神の国の宗教運動　→　隠喩としての「神の国」

４．イエスの福音
①「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）
②「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マルコ 10:24b ～ 25）
５．「神の国」の宣教（新しい契約の実現）
　国（バシレイア）：神の制定した秩序（支配）　　cf.国家機構、王国
６．神の秩序←→この世の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）的はずれ cf:規則の侵害
　階層性・二分法・対立　　関係の歪み（神関係、自己関係、他者関係）
７．神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済　→　福音
　イエスの宗教運動：巡回・共同生活／論争・教え／奇跡行為（病の癒し）
８．イエス時代のユダヤ社会・地中海世界（この世）：典型的なしかも極端な不平等社会
10．食卓としての「神の国」。誰と食卓を囲むのか、囲みたいのか。
11．開かれた共食における神の国：イエスの宗教運動において現実化しつつあった「神の国」は、イエス運動の食卓を見る限り、罪人と食事を共にするというあり方として確認できる。階層的な社会秩序と関係の歪みに対する徹底的な平等主義である。
12．平等な開かれた食卓としての救い：
　人間としての自己肯定可能な共同体内に自分の居場所を見出すこと＝意味の回復
　断片的実現と未完成な全体、神の国は生成途上にある。
cf. 理念と現実の緊張・対立（ずれ）　→　キリスト教の動的展開
　「神の国は近づいた」＝未だ生成途上にある。
13．イエス時代の通常の「神の国」理解：預言者的終末論、黙示的終末論
　イエス運動における「神の国」の意味の転換＝隠喩化
　善人が入ることができる神の国　→　罪人が招かれる神の国
14．知恵の教師イエス：慣習的知恵（既存の秩序肯定）、転換的知恵（既存の秩序転換）
15．知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵
17．宇宙論的問題設定、宇宙的キリスト、あるいは拡張された神の家族の射程
18．エコロジー神学にとっての「神の国」・終末論

10．新約聖書３――イエスの譬え

（1）「イエスの譬え」解釈史――聖書から宗教改革へ

１．アレゴリカルな解釈（寓意的解釈）・新約聖書の「譬え論」

・アレゴリカルな解釈は新約聖書自体に遡る。マルコ福音書(マルコ 4.10-13)の譬え論

・アレゴリカルな解釈の本質と問題性

a.「共同体の外部と内部の区別」は譬え解釈に次のような役割を与える。

1.外部向けの教えの形式→秘密の教え＝奥義を外部の者から守る

2.教育

b. 隠喩の代置理論(Substitution Theory)：暗号と暗号解読

２．アレゴリカルな解釈の伝統から、字義的意味と霊的意味の二重性へ

・聖書テキストの意味の多重性：四重の意味

sensus litteralis, historicus, carneus / sensus aetiologicus / sensus analogicus, spiritualis
sensus allegoricus

ポイント：

・歴史的・字義的―比喩的が基本枠、古代キリスト教における解釈学の多様性

・旧約聖書と新約聖書との連関

・歴史的・字義通りの意味が基盤

・霊的意味は解釈の到達目標→聖書解釈は何を目指すのか、どこで終わるのか

・四重の意味の議論と信仰のダイナミズム

・二つの問題

1.意味の実体論（実体形而上学）　2.解釈者の恣意性の介入

加藤武『アウグスティヌスの言語論』創文社、204-229 頁。

３．アレゴリカルな解釈の神学的人間論における基礎付け

オリゲネスの解釈学

・人間＜霊・肉、霊・魂・身体＞　→　歴史的字義的意味と霊的意味

・神の救いの業と人間存在との相関性

・聖書の字義通りの意味における中断の存在＝読者を内面的な意味へ導くため

４．教義的解釈（教義の読み込み・教義の枠組みにおける読解）

アウグスティヌスの場合　(Quaestiones Evangeliorum 2.19)：

５．宗教改革とアレゴリカルな解釈の克服

(1)宗教改革の原理と霊的意味の探求との関わり

歴史的字義的意味（→近代聖書学）から解釈学的プロセスの終点へ

(2)ルターの聖書解釈におけるアレゴリーの扱い方の両義性

アレゴリカルな解釈の適用と放棄

(3)解釈学的問題から信仰内容の分析へ

オリゲネス：　人間存在の構造から聖書解釈へ

(4) Robert H. Stein, *An Introduction to the Parables of Jesus*, The Westminster Press, 1981.

For Luther, the Scriptures were to be interpreted literally, i.e., grammatically, not allegorically. Whereas Luther was sound in regard to theory , his practice unfortunately was not always consistent with his theory in that he tended to allegorize the parables and find everywhere in them examples of the doctrine of justification by faith.

Clearly, the best and most consistent exegete of all the Reformers was John Calvin (1509-1564), whose commentaries contain many lasting insights and still reward their readers. Like Luther, Calvin protested against the allegorical method of interpretation, and he referred to the allegorizing of the early church as "idle fooleries." It is not surprizing, therefore, to find in his works the first explicit rejection of the Christological interpretation of the parable of the good Samaritan. (49)

With such insights it is obvious that Calvin's methodology for interpreting the parables was

clearly centuries ahead of his time. (50)

（２）近代聖書学とイエスの譬え――イエスの譬えの歴史性

６．Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt 1976（1888 / 1899）

Erster Teil: Die Gleichnisreden Jesu im Allgemeinen
Zweiter Teil: Auslegung der Gleichnisreden der drei ersten Evangelien

・アレゴリカルな解釈からの決別　→　譬えの歴史性と文学性
・隠喩の代置理論、アリストテレスの修辞学　→　文学性の理解における限界
隠喩→アレゴリー、比較→譬え　（ロロフ）
・イエスの譬えはアリストテレス的な修辞学とは別の法則性の基づいている。

７．ブルトマン、ドッドからエレミアス

Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Göttingen, 1979（1921）.
C.H.Dodd, *The Parable of the Kingdom*, New York, 1961（1935）.
Joachim Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1984（1947）.

20 世紀の譬え研究はごく最近まで、聖書学全体の動向を反映して、ユリヒャーの示した議論の内の歴史性の議論の線上で展開してきた。

・歴史性への過度の集中、歴史への偏重
文学的言語的な分類の問題は歴史的社会学的問題設定に従属している。
・エレミアス：新約聖書テキストはもっぱらその歴史的原初形態（イエス自身の言葉）の再構成のための資料として理解されている。

（３）エレミアス以降の譬え解釈――歴史から構造、言語自体へ

８．文献

Eta Linneman, *Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1978（1961）.
Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus*, Tübingen, 1979（1962）.
Robert W. Funk, *Language, Hermeneutic, and Word of God*, New York, 1966.
Parables and Presence, Fortress, 1982.
The Good Samaritan as Metaphor
Dan Otto Via, *The Parables.Their Lirerary and Existtential Dimension*, Fortress, 1967.
John Diminic Crossan, *In Parable. The Challenge for the Historical Jesus*, New York, 1973.
Aos N. Wilder," An Experimental Journal for Biblical Criticism. An Introduction," in: *Semeia* 1,1974.
, *Jesus' Parables and the War of Myths*, Fortress, 1982.
Norman Perin, *Jesus and the Language of the Kingdom*, Fortress, 1980（1976）.
Daniel Patte, *What is Structural Exegesis ?*, Fortress, 1976.
Paul Ricoeur, "The Language of Faith / Listening to the Parables of Jesus," in: Charles E. Reagan and David Stewart（eds.）, *The Philosophy of Paul Ricoeur*, Beacon Press 1978
Gerhard Sellin,"Allegorie und Gleichnis," in: *ZThK 75*, 1978.
Aurel von Jüchen, *Die Kampfgleichnisse Jesu,* München, 1981.
Wolfgang Harnisch（hrsg.）,*Gleichnisse Jesu. Positionen der Auslegung von Adolf Jülicher bis zur Formgeschichte*, Darmstadt, 1982.
Herman Hendrichx, *The Parables of Jesus*, Harper & Row, 1983.
Hans Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, Göttingen, 1984.
Martin Petzoldt, *Gleichnisse Jesu und christliche Dogmatik*, Göttingen, 1984.
Wolfgang Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, Göttingen, 1985.
Robert W.Funk, Bernard Brandon Scott, James R. Butts, *The Parables of Jesus. Red Letter Edition. The Jesus Seminar*, California 1988

Robert Winterhalter with George W. Fisk:, *Jesus' Parables. Finding Our God Within*, Paulist Press, 1993.
William R. Herzog ll, *Parables as Subversive Speech*, Westminster / John Knox, 1994.
Eduard Schweizer, *Jesus, das Gleichnis Gottes*, Göttingen, 1996（1994）.

１）文学性の復権、反歴史主義
構造主義的譬え解釈
２）文学性と歴史性とのバランスの回復から思想へ
↓
解釈学的プロセスに基づく譬え解釈
これは歴史概念と言語概念との本格的な問い直しを要求する。
80 年代リクールの意味

９．Paul Ricoeur," Listening to the Parables of Jesus."

What makes sense is not the situation as such, but, as a recent critique has shown, it is the plot, it is the structure of the drama, its composition, its culmination, its denouement. （240）

a network of intersignification, to understand each one in the light of the other （242）
Mt.13:45-46,47-49
Three critical moments emerge: *finding* the treasure, *selling* everything else, *buying* the field （240）
Event（the newness）/ Reversal / Doing
the event comes as a gift. （241）
The power of this language is that it abides to the end within the tension created by the images.
think through the richness of the images / metaphor （242）
The challenge to the conventional wisdom is at the same time a way of life. We are first disoriented before being reoriented.
reorientation by disorientation, extravagance
this dramatization is both paradoxical and hyperbolic. （244）
surprising strategy of discourse.
To listen to the Parables of Jesus, it seems to me, is to let one's imagination be opened to the new possibilities disclosed by the extravagance of these short dramas. If we look at the Parables as at a word addressed first to our imagination rather than to our will, we shall not be tempted to reduce them to mere didactic divices, to moralizing allegories. We will let their poetic power display itself within us.
poetic power of Parables / the Event / Reversal / Decision（moral） （245）
cf. Crossan, McFague

10．聖書テキストの解釈によるキリスト教信仰の内容の解明という試みとの関連で、次のような課題に取り組む必要がある。

１）聖書テキスト読解の「解釈学的プロセス」モデル
個別研究／共同研究
宮本久雄、山本巍、大貫隆　『聖書の言語を超えて　ｿｸﾗﾃｽ・ｲｴｽ・ｸﾞﾉｰｼｽ』（東京大学出版会）
２）聖書テキストの形成史・解釈史を宗教史・教会史の中に位置づけること
３）信仰の共同体的レベルの解明へ
キリスト教思想の方法論的問題、パラダイム概念の妥当性

（４）イエスの譬えから、神の国の現実性へ、あるいは人間存在の時間性
＜イエスの譬え解釈の前提・仮説＞

1)イエスの宗教（宗教運動と宗教思想）の解明について
・19 世紀のイエス伝研究の否定的総括

・伝承史の解明の方法論的限界
2)イエスの宗教の核心点としての「神の国」のリアリティー（終末論的宗教）
3)イエスの譬え研究の意義
・ 神の国の譬えから神の国のリアリティーを理解すること
譬えの語りと読解において､神の国がいかなる仕方で我々の了解へと到来するのか（言葉の出来事)、それは何を（信仰のダイナミズム）引き起こすのか、神の国とは何か。というよりも、神の国は何をもたらし何を引き起こすのか、どこで神の国の到来を知るのか？

＜構造分析の階層性＞
・単一の譬えの構造
・譬え群の構造
・新約聖書の文書単位の構造
・新約聖書の構造
・聖書の構造：聖書の思惟構造
↓
12．J.D.Crossan, *In Parables. the challenge of the historical Jesus*, Harper & Row,1973.
Parables of Advent : The Sower, The Mustard Seed
Parables of Reversal : The Good Samaritan
Parables of Action : The Wicked Husbandmen, The Servant Parables
Group A: The Doorkeeper, The Overseer, The Talents, The Throne Claimant
Group B: The Unmerciful Servant, The Servant's Reward, The Unjust Steward, The Wicked Husbandmen, The Vineyard Workers
↓
到来／転換／行為：
神の国の現実性は、まず、構想力に作用し、新しい存在可能性を開示することによって、行為へと動機づける。詩学から倫理学へ。

＜解釈学的プロセス＞ → プロセスの反復
①ミメーシス１： 先行理解
読者の素朴な読解、古い自己 「話者－聴衆」状況（先行理解２）
言葉の出来事１
↓
文学批判１，歴史批判
②ミメーシス２：テキスト構造→形態的意味の形成（意味→指示）
テキストの構造分析：文学批判２
読解プロセス ↓ 信仰共同体・伝統の寄与（ガイドライン）
テキスト世界（可能世界）の開示
言葉の出来事２
③ミメーシス３：テキスト世界の自己化・地平の融合
自己のメタモルフォーゼ
新しい自己－新しい存在
キリストの形
第二の素朴さ
↓
思想批判、釈義
13．<u>ミメーシス１</u> ：テキストの歴史性
＜テキスト解釈の前提：テキストに対する先行理解＞

1) テキスト読解の先行理解とテキスト生成の先行理解　：Bultmann、Vorverständnis
2)暗黙的な世界理解→古い自己・古い存在、自己の自明性　　Als-Struktur
3)「話者－聴衆」の状況（発話状況→言葉の出来事１）、作品作成の先行理解

＜聖書テキストの解釈の適切な出発点：二つの先行理解の合致＞
4) 読者の権利、テキストの権利、テキスト形成者（共同体）の権利
5)二つの先行理解に合致の学問的確保としての聖書学（歴史批判）
6)リクール：物語の筋・プロットの作成と行動という実践的世界
　　アリストテレス：行為の再現としての悲劇
　　→ミメーシス１
7)概念のネットワーク、象徴体系、時間性→実践的世界の了解（世界内存在の理解構造）
　　Peter Berger and Thomas Luckmann, *The social Construction of Reality*,
　　Penguin Books　1966（1979）
14. ミメーシス２　：テキストの文学性・言語性
1) テキスト作成：自律的な存在として固定化される→ 一定の完結した形態と構造
2)テキスト：いくつかの小事件からその「主題」を問いうるような意味ある全体
（Textkohärenz）として物語を構成
3)ミメーシス１とミメーシス３を媒介：「テキストのストラテジー」（Textstrategien）
　　不確定箇所（インガルテン）
　　「空所」（Leerstellen）の機能：連辞と範列の二つの軸
4)テキストの構造分析
　　構造主義と聖書解釈：構造分析にも歴史的情報は不可欠
5)読解プロセス：イマジネーション→イメージ形成→意味の了解
　　感情
6)イーザーの読解過程の現象学：「主題－地平」構造における記憶・射映・期待
　　イメージ形成の自己修正的な動的プロセス
　　イメージ・形態的意味（Sinnkonfiguration）＝テキスト世界の開示
　　テキストの意図と解釈行為との弁証法（エーコ）
7)解釈すべきテキスト本文の確定、テキストの基本性格の把握（複合性、成立年代、
著者と場所）、　文学批判１（本文批判）
テキストの構造分析、テキスト読解における典型的な意味構成過程の再現、
　　文学批判２、テキストの言語的･文学的機能の理解
8)成功した宗教的テキストの宗教的読解：このプロセスは自己の意味世界の変革につながるもの→言葉の出来事２
　　言葉の出来事１：「話者－聴衆」状況における出来事･意味も弁証法
　　言葉の出来事２：「テキスト－読者」状況における構造・解釈の弁証法
　　１と２を媒介する解釈の伝統、解釈共同体の存在
　　言葉の出来事の連続性に基づく「史実のイエス」への遡及
9)説教におけるイメージの投入、読み手の想像力に訴える
15. ミメーシス３
1) テキスト構造と読者のイマジネーションとの相互作用（ミメーシス２）
　　テキストという他者との出会い→古い自己の在り方への反省
　　新しく示された現実理解の受容
2)テキスト世界の自己化による自己の拡張
3)イエスの譬えにおいて神の国が到来（言葉の出来事）
　　→　生の形態化としてのキリスト教信仰、「キリストの形」になる
　　（キルケゴール）
4)解釈学的プロセス：歴史批判と文学批判に基づく思想批判

テキストの言語機能の回復→イメージとの共感、自己の転換、行動
＜意味から指示へ＞　ミメーシス２からミメーシス３へ：
聖書テキストの解釈は何を目指しているか、どこで終了するのか？

＜読解プロセスと信仰との対応＞
5）古い存在から新しい存在へ転換（Old Being → New Being）：
断片的・予期的な存在の転換過程
1)イエスの宗教運動：
「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ１：１５）
神の国の接近→「悔い改める」という存在転換→イエス運動の内実
2)ヨハネによる福音書の信仰論
8）回心のプロセス
Paul Tillich, *Systematic Theology vol.3*, The Univ. of Chicago Press 1963
conversion is not necessarily a momentary event; it is in most cases a long process which has been going on unconsciously long before it breaks into consciousness, giving the impression of a sudden, unexpected, and overwhelming crisis. （219）

（５）「放蕩息子の譬え」
１：テキスト形成に関わる先行理解（聖書学）
1. 文学批判１：二資料仮説との関わり、二部構成の理解、テキストの範囲の確定
2. 歴史批判：
・社会構造：甚だしい貧富の差、階層格差の存在。
・財産分与の法的背景：
・論争というルカの状況設定とイエス運動の歴史的事実
Wolfgang Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, UTB1343　1985　S.200-230
Joachim Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, Vandenhoeck & Ruprecht　1947
3..聴衆にとっての神の国：
・黙示文学的な宇宙的規模の出来事とその切迫性
・イスラエル民族国家（ダビデ王朝）の再建
4.テキスト形成の先行理解の解明：「浄－不浄」の社会コード、因果応報
２：読者の先行理解（文学批判２）
1.神の国の譬え：読者、解釈者は、イエスの譬えを「神の国」との連関で理解しようとする。つまり、譬えの指示対象は「神の国」の現実である。
2.「浄－不浄」の社会コードに相当するコード、因果応報
3.人生と自己責任（個人主義・世俗主義）
３：行為体分析
逆転構造、開かれた物語（結末がない？）：
譬えの逆転構造における転換点はどこにあるか？
４：聴衆・読者の読解プロセス　→　隠喩過程（解決の奇抜さ→驚き）
聴衆・読者の視点は？
＜ポイント＞
1) 聴衆にとって 11b-20a の部分の物語展開は現実理解の範囲内
2) 驚くべき父親の行為。奇抜な解決・違和感→圧倒的な実在感
3) 兄：悪役としての描写（ストラテジー）
新しい秩序（出来事）の現前によって追い越されてしまった古い現実理解
古い秩序と新しい秩序とのコントラスト
4) 開かれた結末（空白）→　読者のイマジネーションしその後兄はどうなったのかについて考えるように仕向ける

５：ミメーシス３

１）逆転構造に対応した内容

こんな父親は存在するか？

聴衆の驚きは､読者にとっていかに再現されるか　→　イメージは思考を刺激し自己反省の回路を開く

（テキスト自身に語らせること＝言葉出来事）

２）愛の過剰・神の国の祝祭

父の愛は、弟と、聴衆の、読者の、期待を超えて、思いがけず到来する。

この過剰な愛は、人間関係の現実性を浮かび上がらせる。

この状況の中に、神の国（恩恵・救い）は存在を肯定できない敵を救済しつつ到来する

３）人間の状況

・ 回心：死から生（再生）へ、では兄は？
・ 人間の罪（自己疎外）の二つの形態　→　影
・ 現代の読者：自分はどこにいるのか。受け入れがたい自己の姿

自分にとって回心とは？　果たしてそれは期待できるか？

「（あなたは）どこにいるのか」（創世記３：９）

「（わたしは）ここにいます」（サムエル記上３：４）

０．伝統的な解釈：　アレゴリカルな解釈：教義的な枠組みにおける暗号解読

父：神

兄：イスラエル民族

弟：キリスト教会

Robert H. Stein, An Introduction to the Parabels of Jesus, The Westminster Press　1981

Tertullian interpreted this parable in the following way; the older son represents the Jew who is envious of the divine offer of salvation to the Gentile; the father represents God; the younger son represents the Christian; the inheritance that was squandered represents the wisdom and natural ability to know God which man possesses as his birthright; the citizen in the far country represents the devil; the swine represents the demons; the robe represents the sonship which Adam lost through his transgression; the ring represents Christian baptism; the feast represents the sacrament of the Lord's Supper, and the fatted calf slain for the prodigal represents the Savior present at the Lor's Supper.　(44)

Tertullian, On Modesty, Ch.9

Adolf Jülicher, Die Gleichnisreden Jesu I/II,　Darmstadt, 1910 [2]（1976）.

６．解釈学的プロセスから思想へ

1. 神の国とは　→　イエスの宗教運動（教え、論争、共食、癒し）

信仰：神の国へと開かれた生、生の開放性の共同体

特定の固定化された内容に重点があるわけではない

期待を遙かに超えた驚くべき喜び・応答：死から生へ、因果応報を超えて

兄の存在理由：神の国の祝祭ははじまったばかり、まだ和解していない人がいる。兄との和解は未決である（＝歴史の未決性)。

歴史における神の国の断片性

2.キリスト教は他の諸宗教をいかに理解するのか

3.神と人間との関係：この譬えの読解おける父と子のアナロジー（家族というメタファーの射程）

4. 死と対立を超えるものは何か。別の秩序のヴィジョンの存在意味

黙示文学的終末論の再評価

ヨエル書３：１「その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ／あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る」

Ernst Bloch, *Das Prinzip Hoffnung*, 1959 （STW. 554,555,556）

＜放蕩息子＞ Luke 15

1. 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。 2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、
「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。 3 そこで、イエスは次のたとえを
話された。
4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、
見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。 5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、6 家に帰
り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。 7 言
っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよ
りも大きな喜びが天にある。」
8 「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、 ともし火をつけ、家を掃
き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。9 そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無く
した銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。10 言っておくが、このように、一人の罪
人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」
11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことにな
っている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もたたないうち
に、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。14
何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15 それで、その地方
に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご
豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。 17 そこで、彼は我に返って言った。
『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで餓え死にしそうだ。 18
ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しま
した。 19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』 20 そして、彼はそこをた
ち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首
を抱き、接吻した。21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。
もう息子と呼ばれる資格はありません。』 22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、
この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。 23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさ
い。食べて祝おう。 24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、
祝宴を始めた。
25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。 26 そこで、僕の
一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。 27 僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎え
たというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』 28 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだ
めた。29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたこ
とは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませ
んか。30 ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子
牛を屠っておやりになる。』 31 すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは
全部お前のものだ。 32 だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。
祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

＜参考文献＞

１．Ｊ・エレミアス『イエスの譬え』新教出版社。
２．ノーマン・ペリン『新約聖書解釈における象徴と隠喩』教文館。
３．W．ハルニッシュ『イエスのたとえ物語　隠喩的たとえ解釈の試み』
　　日本基督教団出版局。
４．荒井献『問いかけるイエス　福音書をどう読み解くか』NHK出版。